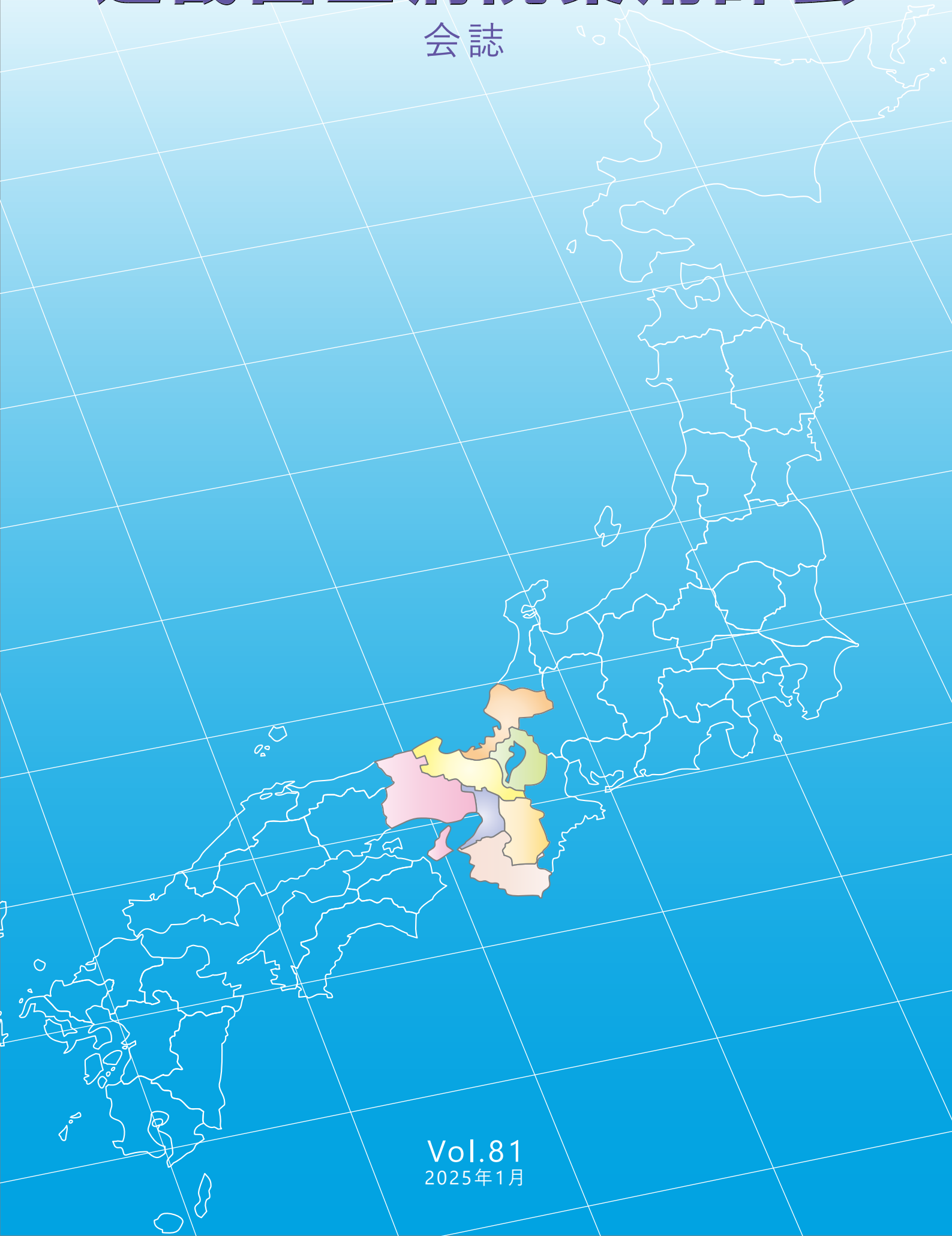
近畿国立病院薬剤師会

会誌



Vol.81
2025年1月

目　次

新年のご挨拶. 3
神戸医療センター 本田 富得

提言. 4
紫香楽病院 上野 智子

薬剤部紹介. 5
大阪南医療センター 庄野 裕志

2025 年度 近畿国立病院薬剤師会総会報告. 7
宇多野病院 白井 祐也

近畿国立病院薬剤師会 シンポジウムの参加報告. 10
あわら病院 福島 庸希

近畿国立病院薬剤師会シンポジウム報告書. 11
宇多野病院 江澤 惠

医療薬学フォーラム 2024（第 32 回クリニカルファーマシーシンポジウム）参加報告. 12
京都医療センター 森本 健幹

第 34 回日本医療薬学会年会 参加報告. 13
敦賀医療センター 藤原 純平

第 78 回国立病院総合医学会に参加して. 14
舞鶴医療センター 山口 志郎

感染制御認定薬剤師の取得について. 15
東近江総合医療センター 土江 亜季

趣味のページ. 17
近畿中央呼吸器センター 川上 侑希

編集後記. 19

新年のご挨拶

近畿国立病院薬剤師会　会長
神戸医療センター　本田　富得

新年おめでとうございます。

近畿国立病院薬剤師会の皆様におかれましては、健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。平素は本会事業にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

昨年を振り返りますと、学術大会では、より多くの会員が発表・情報交換できるよう、バーチャル空間を活用した企画を実施いたしました。また、会員間の親睦を深めるため、シンポジウムではデザートケーキビュッフェを取り入れたところ、集合研修にもかかわらず多くの会員にご参加いただきました。一方で、委員会活動においては、各委員長を中心に情報提供、WEB 勉強会、委員会間の連携による勉強会など、様々な企画に取り組んでいただきましたが、参加者数が伸び悩むという課題が残りました。この点については、今後の取り組み方を検討する必要があると考えております。具体的には、参加者へのアンケート等を通じてニーズを把握し、企画内容や周知方法の見直しを図るなど、改善策を講じていきたいと考えております。

今年の事業についてですが、学術大会は昨年とコンセプトを変えず、どの施設からも演題発表をしていただけるよう、昨年同様にバーチャル空間を利用した発表会を継続いたします。スキルアップ研修会は、過去 2 年間実施してきたフィジカルアセスメントに関する研修会から内容を一新し、学術的なテーマを取り上げることで、新たな視点からのスキルの向上を目指したいと考えております。

また、本年は「2025 年問題」が注目される年です。団塊の世代が 75 歳以上となる 2025 年以降、高齢者人口の急増に伴い、医療・介護ニーズの大幅な増加が見込まれる一方、現役世代の減少による人材不足が深刻化することが懸念されます。こうした状況下、薬学部（6 年制私立薬科大学・薬学部）の志願者は近年減少傾向にあり、2018 年度の 8 万 9806 人に対し、2023 年度は 6 万 7927 人まで減少しているというデータがあります。これは、薬剤師を取り巻く環境が厳しさを増していることを示しています。このような状況ではありますが、会員の皆様の業務に少しでもお役に立てるよう、当薬剤師会の活性化と発展に尽力し、本年も誠心誠意運営に取り組んでまいります。会員の皆様には、引き続きご理解とご協力をお願い申し上げます。

提言

紫香楽病院　上野　智子

早いもので 2024 年 4 月に紫香楽病院に赴任してはじめての冬を迎えました。信楽は標高が 250m 前後ある盆地のため聞いていた以上の寒さですが、病院の雰囲気は暖かく周囲の方々に日々助けていただいています。

ここ「シガラキ」という地名の由来は、諸説ありますがはっきりしないそうです。「紫香楽」も「信楽」もどちらも美しい漢字ですが、当院の「紫香楽」は聖武天皇が奈良時代に造営した都の 1 つである「紫香楽宮（しがらきのみや）」からになります。一方「信楽」は仏教用語の「シンギョウ」に由来するとされており「正倉院文書」に表記されています。

また有名な信楽焼は、鎌倉時代中期にはじまり今日まで時代に合わせて様々な変化をしながら 800 年以上続いている日本六古窯のひとつです。信楽焼といえばたぬき、というイメージがあり当院もたくさんのたぬきが出迎えてくれますが、この信楽焼のたぬきの置物は、実はそれほど昔からではなく、明治に陶芸家の藤原銕造氏が作ったものが原型です。1951 年（昭和 26 年）昭和天皇が信楽に行幸された際、日の丸の旗を持たせた信楽たぬきを沿道に並べて歓迎しました。その光景を目にして感動した昭和天皇が歌を詠まれたことが全国に報道され、定着したと言われています。

「他抜き」という語呂合わせから、たぬきの置物は商売繁盛の象徴として広く使われていますが、特に、信楽焼のたぬきの置物は「八相縁起」と呼ばれる 8 種類の意味が込められています。

＜笠＞思いがけない災難を避けるため、ふだんから準備
＜笑顔＞お互いに愛想よく
＜大きな目＞周囲を見渡し、気を配り正しい判断ができるように！
＜大きなお腹＞冷静さと大胆さを持ち合わせよう
＜徳利＞人徳を身につけよう
＜通い帳＞信用第一です
＜金袋＞ずばり！金運
＜太いしっぽ＞何事もしっかりした終わりを！　　（信楽町観光協会 web サイトより）

本来は商売の話ですが、非常時に備えて準備をする、冷静で最善の判断ができるように周囲を見渡して気を配る、お互い愛想よく接する、などは医療の現場で働く上でも同様に重要なことでもありますし、人徳は医療従事者が社会から求められている大切な資質です。

先生方にも上記のようなそれぞれご自身の働く上での座右の銘や心得などはあるのではないでしょうか。常に心掛けて行動しようと考えていても、どうしても難しくなる時はあります。よって文字にして読み返したりするなど、折に触れ振り返ることも大事かと思います。たぬきを店先の常に目に付くところに置くことは、縁起物というだけでなく、おそらく商売をする側の戒めにもなっているのでしょう。私も院内のたぬきも戒めのひとつとして、日々に流されることなく自分を律していきたいと思います。

独立行政法人国立病院機構　大阪南医療センター

【病院概要】

大阪南医療センターのある河内長野市は、大阪府の南東端に位置し、金剛・岩湧山系の恵まれた自然と史跡や街道など歴史文化遺産が豊富にあります。中でも、国宝　観心寺は、医療安心のご利益がある北斗七星（星塚）と如意輪観音（本堂）が有名です。

大阪南医療センターは、大阪第一陸軍病院（堺市金岡市）を元とし、昭和 20 年 9 月に進駐軍の接収により現在地へ移転、同年 12 月に厚生省へ移管され「国立大阪病院」となりました。その後、平成 16 年 4 月の独立行政法人化に伴い、「独立行政法人国立病院機構　大阪南医療センター」に改称され、現在に至ります。

病床数 384 床、標榜診療科は 32 診療科の急性期総合病院で、政策医療の循環器病、骨・運動器疾患、免疫異常、がんに関する専門的な医療を提供する機能を備えています。免疫異常やがんについては、「大阪府難病診療連携拠点病院」、「地域がん診療連携拠点病院」、「がんゲノム医療連携病院」に指定され、地域の医療機関や大学病院と連携しながら高度で専門的な医療の提供と臨床研究、教育研修及び情報発信を行っています。

令和 5 年 3 月より緩和ケア病棟を開設し、自宅や施設での療養が困難な患者が自分らしく、安心して過ごせるようサポートしています。

【薬剤部概要】

薬剤部は薬剤部長、副薬剤部長 2 名、主任 7 名（調剤主任、薬務主任、製剤主任、病棟業務管理主任、医薬品情報管理主任、治験主任）、薬剤師 18 名、薬剤助手 4 名の 32 名で構成されています。

平成 24 年より病棟薬剤業務実施加算の算定を開始し、令和 5 年度には HCU での病棟薬剤業務を開始しました。また、チーム医療（ICT、NST、褥瘡、がん化学療法、PCT、認知症サポートチーム、糖尿病教室）にも積極的に参画し、それぞれの専門知識を活かして、多職種と連携を図っています。

また、令和4年 1 月から院内処方の代行修正・疑義照会 PBPM を開始し、タスクシフト・シェアを推進し医師の業務負担軽減を図りつつ、疑義照会を速やかに行うことで医薬品の適正使用につなげています。また、全自動秤量散薬分包機を導入するなど機械化を進めるとともに、薬剤助手に業務を補助してもらい、安全で効率の良い調剤業務を行っています。

外来においては、従来より行っていたがん治療の診察前面談の対象患者を令和6年度より拡大することでプレアボイド件数の増加につなげるなど、安全で安心な医療の提供を心がけています。

（文責：庄野裕志）

2025 年度　近畿国立病院薬剤師会総会報告

宇多野病院　白井　祐也

2025 年度 近畿国立病院薬剤師会総会が、2025 年 1 月 11 日（土）に大阪市中央公会堂にてハイブリッド形式で開催された。山下副会長の開会の辞より総会が開始となり、本田会長より挨拶を頂いた。議長には、南和歌山医療センター 池上副薬剤部長が選出され、2024 年度事業報告、会計報告、会計監査報告があり、全て承認された。
続いて、2025 年度事業計画案、予算案について審議され、全て承認された。続いて、近畿国立病院生涯教育センター　本田理事長より事業報告がなされた。最後に田路副会長の閉会の辞をもって総会が終了した。

日　　時：2025年1月11日（土） 13:00～14:20
開 催 場 所：大阪市中央公会堂
開 催 方 法：ハイブリッド開催
出　席　者：対面者 95 名、Web 85 名、委任者 103 名（会員数 318 名）
　　会則 12 条 5 項に従い、会員過半数出席により総会が成立
司　　会：山下副会長（大阪医療センター　副薬剤部長）
開 会 の 辞：山下副会長（大阪医療センター　副薬剤部長）
議　　長：池上副薬剤部長（南和歌山医療センター　副薬剤部長）
閉 会 の 辞：田路副会長（敦賀医療センター　薬剤部長）

1.　報告事項

1）　2024 年度事業報告

①　事業報告

各担当理事、委員長または副委員長より 2024 年度事業報告について資料の通り報告がなされた。

・総務	辰己総務担当理事（神戸医療センター）
・企画	水津企画担当理事（大阪刀根山医療センター）
・広報	中野広報担当理事（国立循環器病研究センター）
・臨床研究委員会	庄野委員長（大阪南医療センター）
・治験委員会	松本委員長（姫路医療センター）
・医薬品情報委員会	村津委員長（大阪医療センター）
・がん・緩和・精神委員会	長谷川委員長（大阪医療センター）

・感染・免疫・アレルギー委員会　横山委員長（敦賀医療センター）
・循環器委員会　池上委員長（京都医療センター）
・糖尿病委員会　上田委員長（南和歌山医療センター）
・栄養・褥瘡委員会　海家委員長（大阪医療センター）

② 地区会報告

各地区理事より地区会活動について資料の通り報告がなされた。

・京都北部・福井地区　山下地区理事（あわら病院）
・京都南部・滋賀地区　塚原地区理事（京都医療センター）
・兵庫南部地区　長門石地区理事（姫路医療センター）
・大阪北部・兵庫東部地区　熊谷地区理事（兵庫中央病院）
・大阪南部地区　坂井地区理事（近畿中央呼吸器センター）
・奈良地区　今本地区理事（やまと精神医療センター）
・和歌山地区　清水地区理事（和歌山病院）

2) 2024 年度会計報告

田邨経理担当理事（南京都病院）より 2024 年度会計について資料の通り報告がなされた。

3) 2024 年度会計監査

永井監査役（姫路医療センター）より、2024 年 12 月 19 日に会計監査が実施され、適正かつ正確であったとの報告があった。

以上について審議の結果、賛成多数であった。

2. 審議事項

1) 2025 年度事業計画案

各担当理事、委員長または副委員長より 2025 年度事業計画案について資料の通り説明があった。

・総務　辰己総務担当理事（神戸医療センター）
・企画　水津企画担当理事（大阪刀根山医療センター）
・広報　中野広報担当理事（国立循環器病研究センター）
・臨床研究委員会　庄野委員長（大阪南医療センター）
・治験委員会　松本委員長（姫路医療センター）
・医薬品情報委員会　村津委員長（大阪医療センター）

・がん・緩和・精神委員会　　長谷川委員長（大阪医療センター）
・感染・免疫・アレルギー委員会　横山委員長（大阪南医療センター）
・循環器委員会　　池上委員長（京都医療センター）
・糖尿病委員会　　上田委員長（南和歌山医療センター）
・栄養・褥瘡委員会　　海家委員長（大阪医療センター）

2)　2025 年度予算案

田邨経理担当理事（南京都病院）より、2025 年度予算案について資料の通り説明があった。

以上について審議の結果、賛成多数で承認された。

3.　近畿国立病院生涯教育センター事業報告

本田理事長（神戸医療センター）より、以下の事業報告がなされた。

・2024 年度の年間活動報告と各研修会の開催記録について
・認定実務実習講習会の開催状況、開催案内について

以上

近畿国立病院薬剤師会 シンポジウムの参加報告

あわら病院 福島 庸希

2024 年 11 月 30 日(土)に開催された近畿国立病院薬剤師会シンポジウムに参加しましたので報告します。

本田会長の開会挨拶後、一般公演として、大阪南医療センターの井後彩加先生より「術後疼痛管理チームと活動報告」、特別講演として堺市立総合医療センターの浅香倫子先生より「当院における周術期薬剤管理業務と疼痛管理チームにおける薬剤師の役割」についてご講演いただきました。

当院では、現在手術を行っていないため、なかなか普段の業務の中で触れる機会が少ない「術後疼痛管理チーム(APS)加算」についての講演で、非常に興味を惹かれました。

井後先生からは、術前に休薬すべき薬剤の情報提供、術後に再開・開始となる薬剤の提案、ラウンドなど APS での薬剤の役割についてお話いただきました。その中で、薬剤師が効率よく医師や病棟看護師と連携を行えるように、抗菌薬投与量・投与間隔の自動計算のテンプレート作成やラウンド前の患者情報抽出を自動作成で行っている点が、とても印象に残りました。また、APS が介入することにより術後の NRS 改善や早期離床率が上昇した結果を聞き、専門的な知識を持った薬剤師の役割がとても重要だと認識しました。

浅香先生からは、医療チームの立ち上げ時の取り組みについてお話いただきました。医療チームを一から立ち上げるのは大変で、形になるまでとても時間がかかるものだなと感じました。また、他施設の APS の立ち上げ時やその後の取り組み、業務内容について学ぶことができました。今回学んだことを今後の業務に活かしたいと思います。

お二人の先生から、「誰でもできる」から逸脱しないように業務改善や計画を立てるとのお話を聞き、とても大事な考えだと感じました。私もその考えを基に業務に取り組んでいきます。

講演後は、デザートビュッフェを楽しみながら、普段交流のない他施設の先生方と交流することができました。私自身、交流の場にはあまり参加したことがなかったので、とてもいい経験ができました。ここで得たつながりを大事にしていきたいと思います。

最後に、シンポジウム開催にあたりご尽力いただいた先生方、ご講演いただいた井後先生、並びに浅香先生、この度は貴重な機会をいただきましてありがとうございました。

近畿国立病院薬剤師会シンポジウム報告書

宇多野病院　江澤　惠

11/30 に開催された近畿国立病院薬剤師会シンポジウムに参加しましたのでご報告させて頂きます。まず始めに「術後疼痛管理チームの立ち上げとその活動報告について」の講演を聴講致しました。令和４年度の診療報酬改定によって新設された術後疼痛管理チームの中での薬剤師の役割や、チーム介入によって患者に与えた影響、そして今後の課題についてご講演頂きました。印象的だったのが、APS ミーティングの話し合いを行う中で、ラウンド対象患者の絞り込み業務の時間を短縮させたことにより、情報収集に費やす時間を最小に抑えて業務効率化に繋げられたということです。視野が広がることで、より円滑な業務体制を築くことができるのだと知り、多職種連携の重要性を再度認識することができました。

次に「当院における周術期薬剤管理業務と疼痛管理チームにおける薬剤師の役割」の講演を聴講致しました。周術期薬剤管理業務を開始するにあたり、予め1年間単位のスケジュールを組むことで方向性を絞り、それに沿って取り組まれたことについてご講演頂きました。印象的だったのが、実施件数は少ないものの、医師の業務負担軽減・タスクシフトを目的とした常用麻薬のフェンタニル換算業務を取り決められたこと、土日など担当薬剤師だけでなく代理の薬剤師であっても業務を遂行できるようにテンプレートを作成されたこと、そして病棟薬剤師と手術室担当薬剤師の間で休薬確認等の情報共有を実施されていたことです。連携し情報共有をすることで、効率的に業務を行うことができるのだと理解を深められました。

当院では術後疼痛管理加算は取得しておらず、周術期薬剤業務に関してもあまり馴染みがありませんでしたが、両講演ともに普段周術期の業務に従事していない方に対してもわかりやすく講演して頂き、最後まで興味深く聴講することができました。

実地によるシンポジウムに参加するのは今回が初めてでしたが、他の病院の先生方と直接顔を合わせ、交流・情報交換ができ、日々の業務に対するモチベーションが上がる貴重な機会となりました。改めて本企画をご準備頂いた先生方、丸石製薬株式会社の皆様方につきましては、この場を借りて深く感謝申し上げます。

医療薬学フォーラム 2024（第 32 回クリニカルファーマシーシンポジウム）参加報告

京都医療センター　森本　健幹

医療薬学フォーラム 2024（第 32 回クリニカルファーマシーシンポジウム)が、2024 年 7 月 6 日（土）、7 日（日）に熊本県の熊本市民会館シアーズホーム夢ホール、熊本市国際交流会館で開催されました。この学会は 1985 年に日本薬学会が主催、日本病院薬剤師会が共催で第 1 回目が行われ、2005 年からは日本薬剤師会も共催団体となり、今年で 32 回目となる全国規模の学会です。しかし、全国規模の学会ですが大きすぎず、会場間の移動が容易なくらいコンパクトな学会です。ちょうどいいサイズの学会に親近感を覚え、時折参加するようにしています。今回は、2016 年に起きた熊本地震による影響が、今も残る熊本城のすぐそばで行われました。

私は、「血栓性血小板減少性紫斑病に対して caplacizumab を投与した一症例」で、ポスター発表をさせていただきました。血栓性血小板減少性紫斑病（thrombotic thrombocytopenic purpura：TTP）は、全身の微小血管に血小板血栓が形成されることで急性腎障害や血小板減少などを発症する重篤な希少疾患です。治療薬である caplacizumab（capla）は、2022 年に販売承認されたばかりで、使用した症例報告もまだ多くはありません。また TTP の疾患自体が希少疾患であり、capla の薬価も高値であるため常時薬剤部に在庫管理している薬剤ではありません。本症例に対して、救急病棟の薬剤師は、医師、看護師と連携をはかり、入院初日の capla の発注・投与方法・溶解方法の説明などを行い、速やかな投与につなげることができました。そしてその後の退院までのフォローも継続して連携し、TTP の寛解に至ることができました。

学会終了後に、熊本城に立ち寄りました。
地震の爪痕がまだ残っていました。

質疑応答の際には、症例内容についての質問のほか、救命病棟での薬剤師の役割やお互い困っていることなどのお話ができ、充実した時間を過ごさせていただきました。今後の病棟活動等に生かしていこうと考えています。また、本症例は希少な症例ですので、いずれかの雑誌に症例報告として投稿していきたいと考えています。

第 34 回日本医療薬学会年会　参加報告

敦賀医療センター　藤原　純平

第 34 回日本医療薬学会年会が 2024 年 11 月 2 日（土）～4 日（月）の 3 日間にわたり、千葉県の幕張メッセ国際会議場で開催されました。今回も昨年と同様にハイブリッド形式で行われ、私は現地参加しましたのでご報告させていただきます。今回は「未来の医療をデザインする薬学・薬剤師の視点」というテーマで、大学と臨床現場が協働した最新の研究成果等の興味深いシンポジウムをはじめ、心惹かれる数多くの演題がありました。連日、多くの会場で入場制限がかかるほどの賑わいで、他施設での取り組みや自施設では勉強できない分野を学べました。

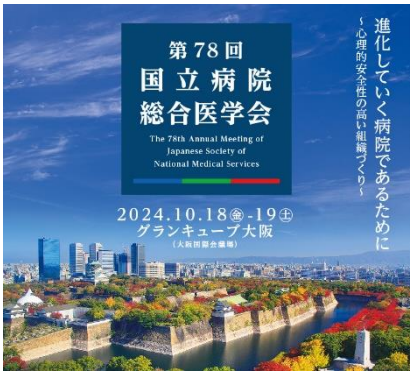
私は「敦賀医療センター（以下当院）における抗がん剤調製遠隔監査システムの構築とその成果」についてポスター発表をしました。抗がん剤の調製は過誤防止の観点より 2 人以上での作業が望ましく、当院では人員の都合上調製者 1 名体制の問題を抱えていました。その打開策として、もともと院内にあった設備・備品を駆使し、一切導入費用を掛けることなく遠隔監査システムを構築し、業務の効率化に成功しました。発表においては当院の取り組みが少しでも他施設の参考となるように、どのような観点で機材・アプリケーションを選択したか、システム導入時にどのようなことに配慮したか、実際に使用して感じる利点・課題を伝えることを意識しました。示説時間には多くの方々から質問をいただき、後日、当院の発表を参考に遠隔監査環境の整備を始めたという嬉しい連絡をいただくこともできました。当院の試みが他施設のお役に立てることを実感し、とてもやり甲斐を感じました。今後も積極的に発表し、情報共有を行うことで病院薬剤師の業務改善、充実化に少しでも寄与できればと思います。

今回は大変有意義な学会発表ができたと共に、様々な発表から大いに刺激を受けました。学会参加で得ることのできた貴重な経験をこれからの業務に活かし、病院薬剤師として今まで以上に貢献できるよう努めてまいります。

最後になりましたが、お忙しい中、慣れない発表やポスター作成に沢山のご指摘やアドバイスをくださった当院薬剤部の先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。

第 78 回国立病院総合医学会に参加して

舞鶴医療センター　山口　志郎



2024 年 10 月 18 日、19 日に、大阪府にあるグランキューブ大阪（大阪国際会議場）にて第 78 回国立病院総合医学会が開催されました。私は、「医薬品在庫管理システムを活用した薬務業務のシステム化とタスクシフトへ向けた取り組み」について、ポスター発表を行いましたので報告いたします。

近年、薬剤師は対物業務から対人業務へ移行することが求められています。当院では、薬剤助手に薬務関連業務の補助を依頼していますが、地域特性もあり薬剤助手の増員は容易に行えない状況です。

薬剤師が行っている業務をタスクシフトにするにあたり、2023 年度末にシステムの更新があった医薬品在庫管理システムを活用し、薬剤助手が新たに業務補助を担える時間を構築しました。これらの取り組みについてまとめ、報告しました。

今回の学会では、働き方改革（薬剤領域）のテーマでシンポジウムが企画され、業務の効率化や機器導入、薬剤助手の活用、持参薬から採用薬への切り替えにおける PBPM の活用等の取り組みが紹介されました。また、口演、ポスター発表においても7つのセッションが設けられ、各施設の課題に対する施策が報告されました。

他施設の現状と取り組みを知ることができ、自施設に持ち帰り、試してみようと思える方法を学ぶことができ、有用な機会でした。

最後になりましたが、発表にあたり、ご協力いただいた舞鶴医療センター薬剤部員を始め、ご指導いただいた先生方に御礼申し上げます。

感染制御認定薬剤師の取得について

東近江総合医療センター　土江　亜季

私がこの資格の取得に至った経緯には、まず AST（抗菌薬適正使用支援チーム）に入れていただいたことが大きく影響しています。以前在籍していた大阪南医療センターの AST では、資格を持つ先生方を中心に毎日 1 時間程度のカンファレンスを行っていました。最初は何も分からず加わることに大変プレッシャーを感じましたが、カンファレンスを何度も経験するうちに成功体験もゆるやかに積み上がり、抗菌薬の適正使用を追求する姿勢も少しずつ身についてきたように思います。こんなに危うくなるなんてと思うような感染症の患者が、介入後に軽快し退院していくのを見るのは特に嬉しいものです。感染制御の取り組みは、他にも、実務実習生への抗菌薬適正使用に関する講義や、院内感染対策研修の講師、ICT や感染予防リンクスタッフ会へも加わり環境衛生や手指消毒を一生懸命呼びかける、など多岐にわたります。

感染制御認定薬剤師は日本病院薬剤師会が運営する認定制度の一つで、感染制御について高度な知識と技術、実践力を持つ薬剤師を認定する制度であり、感染症の治療に関する薬物療法について十分な知識を持っていることに加え、院内感染症を防ぐために必要な知識や技術を習得していることが求められるとされています。受験資格においてハードルが高く感じられる要件の 2 つに、1）認定試験の合格、2）感染制御に貢献した業務内容及び薬剤師としての薬学的介入により実施した対策の内容 20 例の報告があります。

2）は 4 つの系統に沿って報告することが求められており、①抗菌薬適正使用支援を実施した症例、②環境ラウンドへの同行などにおいて薬剤師として薬学的知識、技術などを活用して感染予防・感染対策に貢献した事例、③TDM 実施症例、④感染制御や抗微生物薬適正使用に関する、組織内マニュアル・手引き等の作成・改訂や、それらの普及啓発に資する組織内での取り組み事例に分けられます。②や④は少しイメージし難いのではないかと思われますので実際に私が作成した事例を紹介いたします。②では新規の手術クリニカルパス作成時に、術後感染予防抗菌薬の投与期間の相談に対して提案をおこなった事例や、環境ラウンドの際、外来化学療法室に併設した無菌調製室で履物の交換に加えシューズカバーを使うことは過剰な感染対策であるという指摘に、職業性暴露の面からも検討することを提案し採択された事例を記載しました。④では院内採用内服抗菌薬の腎機能別投与量一覧表を作成したことや、TDMガイドラインの改訂内容の周知を目的とした講習会の開催を行ったことなどを記載しました。有資格者の先生に症例の添削やアドバイスなどたくさん援助していただきながら、どうにか合格にこぎつけました。

以前は、分野に純粋に興味があり勉強をし、実力を持ち合わせて自らチームに志願し、さら

に研鑽を積んだうえで資格の取得・・・という流れを想像していましたが、実際には日々こつこつと積み重ねた実績を整理したようだったと思います。最初は未熟なのに AST に入ることに躊躇していましたが、今迷っている自分に声をかける機会があるとすれば、まずはやってみることが近道だと背中を押すと思います。資格を目標として設定すると、集中してきちんと勉強する機会にもなり、受験して本当によかったと思っています。次は感染制御専門薬剤師へとステップアップしてまいりたいと思います。

趣味のページ

近畿中央呼吸器センター　川上　侑希

大阪南医療センターの鈴川先生から引き継ぎました、近畿中央呼吸器センターの川上です。鈴川先生とは大阪南で 3 年間共に業務にあたりました。とても可愛い気の合う後輩と勝手に思っています。

趣味と言えるようなものがないので、好きなことについて書きたいと思います。私は猫が好きで、保育園児の頃から猫を飼うことが夢でした。学生の間は夢叶わず、大学生の時は週一で猫カフェに通っていた時期もありました。転機が訪れたのは入職して 1 年目のリフレッシュ休暇です。社会人 1 年目で心の余裕がなく、旅行の予定も入れていませんでした。長期休みで何をしようか悩み、思いました、そうだ猫を飼おう。

近所のたこ焼き屋さんに、「猫譲ります」のポスターが貼られていたので連絡をとり、保護された野良の子猫を譲って頂きました。当時の私は猫なら何でもよかったので雑巾色の子猫を引き取りました。子猫を見るのは初めてだったので、目やにと鼻水でカピカピの顔も、ボサボサの毛並みも「子猫ってこんな感じなんだー」と呑気に構えていました。

その後、地獄のノミ取り・点眼投薬・お顔拭きなどを経て雑巾色の毛玉から艶々グレーの雑種猫へ成長しました。グレー(灰色)の毛色なので名前はカイにしました。よくロシアンブルーに似ているね、と言われますが、実はコラット似です。

猫は丸まって寝ると思っていましたが、人間と同じように枕を使って寝ます。特に冬は人間が寝ている布団に入ってきて枕に頭を乗せ横になって眠るので、しばしば猫が枕の中央を使い、人間が枕の端に追いやられることもあります。一緒に寝てもらえるので文句は言えません。

猫を飼い始めてから、猫グッズ即売会など物販イベントにも何度か足を運びました。猫モチーフのグッズを買う時は、色があればグレーのグッズを選ぶようになりました。猫の品種や生態、便利グッズなど書きたい話題は尽きません。私にとって癒しの存在である猫をこれからも末

永く推していきたいと思います。

次回は、大阪南からお世話になっている東近江総合医療センターの土江先生に引き継ぎたいと思います。土江先生どうぞよろしくお願いします。

編集後記

◆ 新年あけましておめでとうございます。昨年も多くの先生方から原稿を執筆いただき、ありがとうございました。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

◆ 今年は巳年です。2025 年の十二支は「巳」十干は「乙」、干支は乙巳(きのとみ)です。60 年周期の干支の中で 42 番目になる乙巳は「努力を重ね、物事を安定させていく」ような年と言われています。また、「巳」は「再生と変化」を意味し、脱皮を繰り返すことから不老不死のシンボルともされてきました。蛇のように再生や変化を繰り返しながら、柔軟に発展していく年になると良いですね。

◆ 今シーズン、インフルエンザが大流行しています。当院でも複数の職員でインフルエンザ発症されています。引き続き、お体ご自愛下さい。

◆ 新体制となり、間もなくという短期間に寄稿いただいた先生方、ありがとうございました。今号も充実した内容となっています。皆様、最後までご熟読いただきありがとうございました。

(N.K.)

近畿国立病院薬剤師会会誌　第八十一号　令和七年一月発行
発行元　近畿国立病院薬剤師会事務局　神戸市須磨区西落合 3-1-1
(独立行政法人国立病院機構神戸医療センター薬剤部内)

発行人　会長　本田　富得(神戸医療)

編集　広報担当理事　中野　一也(循環器病研究)
広報委員　佐々木　祐太(大阪南医療)
野田　拓誠(大阪医療)
正木　美有(循環器病研究)